

出題分析			
試験時間	90分	配点	100点
		大問数	3題
分量（昨年比較）	〔減少〕 同程度 増加	難易度変化（昨年比較）	〔易化〕 同程度 難化
<p>【概評】</p> <p>大問数は今年も3題であり、昨年とは異なり（Ⅲ）が外国語学部と文学部で異なる問題が出題され、（Ⅰ）（Ⅱ）は両学部の共通問題であった。出題形式については、例年通り論述問題が中心であり、昨年と同じく記号選択問題が2つ出題されたが、語句記述問題はなくなった。また、資料を用いた出題は昨年より減少し、数年ぶりに統計資料が扱われた。論述問題の総字数は850字程度で、昨年より100字程度減少し、各論述問題の字数幅は50～250字程度であった。極端に難しい資料読解問題や判断に迷う記号選択問題もなく、分量も昨年より減少したため、全体的な難易度は昨年に比べてやや易化したといえる。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
（Ⅰ）	黒海周辺史 ロシアの東方進出	問1：「詩の内容を踏まえて」という設問の要求に応えた解答を作成するのが難しい。詩に込められた隠喩に気づくことができれば、ある程度は解答を整えられただろう。「帝王のお慈悲という名の乳で生まれた」はオスマン帝国の宗主権やスルタンの恩恵を指しており、「余はロシア人の慈悲に養われた」より「血塗れた鷲のような処刑人」はロシアを指しているとわかるし、双頭の鷲から連想することも可能。詩の内容からロシアの傀儡としてギリヤークがクリム＝ハン国を統治したことを想起するのは受験生には困難だろうが、詩の書かれた年号もヒントとなる。なお、クリム＝ハン国の併合後、ギリヤークはペテルブルクでの幽閉を経てオスマン帝国に移送され、処刑された。問2：問1に比べて書きやすく、高得点も十分ねらえたはずだ。字数を考慮すると、ネルチンスク条約の国境線について具体的に書く余裕はないだろう。	標準

(II)	陶磁器に関する歴史	問 1：イ．太陽暦ではなく太陰太陽暦が正しい。 問 2：明の海禁厳格化により貿易が朝貢貿易に限定された点に言及できれば十分だろう。問 3：歴史総合を意識した設問で、日本史に関する知識も求められた。日本の有田焼とオランダ東インド会社の関係についての説明は、世界史の教科書や資料集にも載っている。また、論述のアプローチは異なるが、2019 年の大阪大学入試世界史で類題が出題されている。問 4：統計資料が扱われているが、資料を使わずに選択肢の内容だけで正答を判断できる。	標準
(III)	パレスチナ問題	問 1：関連事項ではあるものの、あくまでパレスチナ問題がテーマであり、フセイン・マクマホン協定やサイクス・ピコ協定について述べる必要はないため、字数を浪費しないように注意したい。また、1930 年代以降にパレスチナへのユダヤ人移民が激増したこととその背景について言及できたか否かで差がついただろう。問 2：100 字程度でまとめるのが難しく、論述の終点をどうすべきか判断に迷っただろう。設問文だけでなく問題文の内容を参考に、ハマースとガザの動向には触れておきたい。	標準

合格のための学習法

大阪大学入試世界史は、要求される知識の水準は基本的に教科書レベルであるものの、資料読解を通じた高い考察力や表現力が求められる。総記述量や出題形式は年度により大きく変わる場合もあるが、前述の特徴はほぼ一貫している。出題形式の変化に惑わされないよう、教科書の復習を中心に基礎的な知識を固めるのはもちろんだが、学んだ知識を複数の事象に結びつけたり比較したりすることにより、歴史的な思考力を養っておく必要がある。また、過去問演習を通じて、設問文を丁寧に読み込む習慣をつけ、設問の要求に的確に答えられるようにしたい。過去問演習の際は積極的に添削を受け、解答作成力を磨くとよいだろう。